

Akatake Times

Vol. 13
(通算 第166号)

7月に入り、いよいよ夏本番の様相を呈してまいりました。
とにかく暑い！
熱中症やエアコンでの寒暖差により、体調を崩しやすい季節です。
日々の体調管理には、くれぐれもお気を付けください。



『向日葵』

浮島の田園地帯に、約1.5万本のひまわりが壮大に咲いています。
当社からも車で10分ほどの所にある花畑、一度ご覧になってはいかがでしょうか？

撮影日時：2014年7月21日

撮影場所：沼津市 平沼



●暑い季節がやってきました。公私とも衛生・安全管理に十分留意していきましょう。

●6月下旬、国民投票で英国がEU離脱を決めたことで、主要国の動きが風雲急を告げています。日本国においては、円高、株安の動きが加速し、経済の見通しが不透明になってきつつあります。我々の力ではどうしようもない事態であります。落ち着くまでにどの程度の時間が必要なのか分かりませんが、一刻も早く沈静化してもらいたと願っています。今後、政治・経済など、ますます混沌とした時代が続くものと思われますので、私どもは、将来に備えやるべきことを愚直に実行していくことが肝要です。強くそう思います。

●現在、少子高齢化問題は毎日のようにマスコミを賑わしています。世間一般のことではなく、それは私ども自身にも降りかかってきていることでもあります。65歳以上の方が26.7%になり、初めて高齢者が4人に1人を超えています。ひとり暮らし、地方の過疎化、社会保障費用、出生率、若者世代の負担などの課題に、政府が党派を超えた取り組みをしていかなければ明日はないように思われます。



●選挙権年齢が、20歳以上から18歳以上に引き下げられました。1945年の終戦直後に25歳以上から20歳以上に引き下げられて以来、70年ぶりの改正とのことです。新たな有権者数は、約240万人で全有権者の約2%に当たるようです。巷では賛否両論がありましたが、私は大賛成です。立候補者の誰に投票していいのかわからなくても、まずは投票所に行き誰でもいいから投票する、それでいいと思います。そこから、次代を担う若者が政治・経済・国内外の社会情勢などと向き合うスタートとなり、大人たちが創ってきた現状を把握し、将来はいかにあるべきかを真剣に考えるキッカケになることを期待しています。少子高齢化の時代に入っている今、育たなくてはならない世代です。

●今、私どもが直面している課題に「介護」、「認知症」があります。これを問題ばかりとして捉えるのではなく、違った角度から取り組んでいる方がいます。介護する／介護される立場ではなく、教える／教えられる立場にという“民俗学”を導入したところが実にユニークであり、我々も参考にすべきではないかと思えます。その方は、沼津市内にある介護デイサービス施設「すまいるほーむ」の管理者・生活相談員である六車由美氏です。過日、六車氏の講演を拝聴する機会を得ました。演題は、「老いの価値を見つめ直すー介護民俗学の実践からー」。副題として、「高齢者と向き合い、人生の先輩として話を聞く。語られる物語の豊かさ、もたらされる発見と感動」です。“介護民俗学”とは聞きなれない言葉です。以下、講演内容を紹介します。

1. 介護現場での聞き書き

- (1) 民俗学における聞き書きとは
 - ・失われつつある地域の文化を記録し、次の世代に継承していくことを目的とする。
 - ・語り手(古老)は、地域において多くの経験をし、生活の知識を持っている存在。調査者は、彼らに教えを受ける立場。
 - ・書くために聞く。
- (2) 介護民俗学の聞き書きとは
 - ・(介護デイサービスの)利用者さんの生き方を理解し、思い出を共有していく。
 - ・教えを受けるという立場で聞く。
 - ・書くために聞く。
 - ・聞き書き者は、相手の言葉に真剣に向き合う。
- (3) 聞き書きを文章に表現する
 - ・ひとりひとりの思い出の記として、雑誌連載や書籍で利用者さんや家族に贈る。
 - ・スタッフにも読んでもらう。
 - ・利用者さんからは、俺の宝だ、これからも私の小説を書いてね、と語りの意欲を持つ。
 - ・利用者さんの記憶が家族、スタッフに継承されていく。

(4) 介護現場での聞き書きで変わってきたこと

- ・利用者さん／聞き書き者＝介護される人／介護する人 というだけの関係性から、教える人／教えられる人という関係性に変わってきた。
- ・利用者さんの人生が立体的に浮かび上がってきて、人生の先輩へ。
- ・利用者さんへの愛情が生まれた。いろいろ大変な場面でも、スタッフが何となく許せるようになった。
- ・認知症の利用者さんの言葉や行動が面白く思えるようになった。
⇒ “人”と人としての関係が生まれていく。

2. ホームでの聞き書きの実践 -聞き書きで利用者とスタッフが協働してかきた(読み札)を作る-

- ・聞き書きの場面では、語り手の語りに聞き手が素直に驚く。
- ・聞き手と語り手との1対1の対話から、みんなで聞き書きをすると、語り手の語りにみんなが注目する。
- ・みんなが自然と思い出を共有していくことになる。
- ・利用者さん同士が互いの生き方に関心を持ち始める。
- ・誰もが言いたいことを気兼ねなく言えるという雰囲気になる。
- ・何か始める時には、まず利用者さんに聞いてみるというのがスタッフの常識になる。

3. 思い出の味の再現

- ・子供の頃の味や子育てをしてきたころの家庭料理など利用者さんの思い出に残っている味について聞き書きをし、それをみんなで再現して味わう。その味が、その方の思い出や思い出と共にみんなの中に沁みてくる。
- ・個として一人一人が存在。
- ・スタッフと利用者さんとの間の助ける／助けられる、教える／教えられる関係がその時々で柔軟に変わってくるようになった。
- ・利用者さん同士も仲間の生き方や経験を知ること、お互いの存在を認め合うようになってきた。

4. 希望としての「遊び」-認知症の利用者さんの人生すごろく-

- ・スタッフが考えた聞き書きのカタチ。
- ・アルツハイマー型認知症の利用者さんに聞き書きをして、人生すごろくに再現する。
- ・みんなで遊びながら利用者さんの人生を追体験する。
- ・その方をたたえる言葉をちりばめることで、その方の人生を肯定していく。
- ・遊びながらその方の人生が自然にみんなに受け入れられていく。
- ・スタッフは、関係づくりの難しかった認知症の利用者さんへの愛情が生まれていく。
- ・人と人との関係が回復し、互いの人生を認め合って共に歩んでいく居場所となっていく。

5. 「私たち抜きに私たちのことを決めないで！」-利用者・当事者の声と向き合う-

- ・介護を受ける立場にある高齢者にどのようなことを望むのか、どのようなことが必要なのかと、尋ねる機会を持つべきだ。介護現場を、もっと、介護を受ける当事者の声を発信できる場にしよう。

6. 結びに

「老い」、「介護」、「認知症」を単なる「対処すべき問題」とするこれまでの見方から脱する必要はある。
介護現場での「聞き書き」は、「老い」に価値を見出していく行為。
それぞれが持つ強さも弱さも互いに認め合い、赦し合って、支え合いながら最後まで共に生きていく、そういう介護現場、地域社会を目指していくことが私たちの未来への希望につながるのではないだろうか、と講師は結んでいる。

高齢者のみならず、個の尊厳について考えさせられた講演でした。

今回は、長々となりました。
ご安全に！

代表取締役社長 赤堀 肇紀

